唐鏡

平沢五郎編

校異篇

古典文庫

唐鏡

平沢五郎編

校異篇

古典文庫

古典文庫第二三七冊

昭和四十二年四月二十日印刷発行　（非売品）

鏡篇

唐異校

編者　平沢五郎

発行者　吉田幸一

東京都板橋区熊野町三四

印刷者　帝都印刷製本株式会社

発行所　東京都（王子局区内）北区西ケ原三ノ三四　古典文庫

電話（九一九）二七一七

振替口座東京一四五九七番

凡　例

一、本篇は先の古典文庫「唐鏡」本文篇に掲録した彰考館文庫本本文に対し、次の三本を以つて各本間の異同を輯録したものである。以下比校三本を撰択した理由は校異篇末に附した伝本解題中に誌したので参照されたい。

各本とその略記号は左記の通りである。

(イ)　吉田幸一氏蔵本……吉

(ロ)　松平文庫蔵本……松

(ハ)　内閣文庫蔵本……内

(ニ)　底本……底

(ホ)　吉松内三本……三

二、唐鏡は元来伝来せる漢籍史書類の抄訳文であり、現存資料からみて、その表記は多分に変則的な和漢の混淆した、いはば一種の書下し文と云へる。従つて

和文化に於ける表記には統一せる一貫性は認められず、送り仮名、仮名遣、漢字と仮名、振仮名等は各本相互間に、又同一本自体に於ても混乱相違が生じてゐる。しかし、それは寧ろ、これらが元来便宜的な手段にすぎなかつたことにより派生した現象と推測される。且つ、右の底本・比校三本ともにいづれもその書写年代が新しくして、近世初期を遡るものはなく、さきの如き諸点を細微に検するも当然原唐鏡の表記に近づき得るものとは考へられない。そこで校異に於ては之等諸点を斟酌して本文の異同を掲出した。本篇は唐鏡通読の便に供するものであつて、厳密に一字一音のすべてに亘る相違を採録する方法をとらず、徒らな煩瑣を避けて、以下の如き省略を私になした。

(1) 各伝本間に於ける漢字と仮名の相違、片仮名と平仮名の相違等は原則として之を省略した。

(2) 次に仮名遣に於ける各本間の異同に就いては前記の如き理由により、特に必要と認められるものを除き、他は之を示さなかつた。

(3) 又、底本（彰考館本）は本書の性格上、送り仮名は之を省略する場合が多く

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

(4)

或は便宜的な簡略化を示す場合が屢々散見される。―例へば、曰↑↓曰ク必↑↓必ズ、承シ↑↓承リシ、見タリ↑↓見エタリ―の如くであり、文脈文意よりすれば当然通読の支障なきものと考へ、これらは採録せず、誤読の惧れあるものに限つて掲出した。又処々に散在する漢詩の返り点・送り仮名・振仮名等も便法として附した場合が多いのでこの際一切を省略した。

各本間、又同一本に於て、同義語として使用しながら異字をもつて表記する場合が多々見出される。例へば、玉ふ↑↓給ふ、云ク↑↓曰ク、者↑↓物、などは殊にその頻度が多い。が之も近世の写本に屢々見られる、半ば慣用化した、極く尋常な表記とみて、その相違は省略することゝした。又この三本共々多出する用例の中で、帝↑↓みかど、軍↑↓いくさ、各↑↓おの〳〵、様↑↓やう、の如き、或は再↑↓ふたゝび、弥↑↓いよ〳〵、自↑↓おのづから、の如きは、各本相互に使用してゐるので、前者同様に省略することゝした。但しこの(3)(4)の初出一例は該当箇処に於てのみ示し、他は異訓の場合のみを掲録した。

(5) 松平文庫本・内閣文庫本の両本には多々漢字に振仮名が附されてゐるが、前記(一)の如く、近世資料として特に訓読上の意義を認め難く、原則として校異の対象としなかつた。

(6) 底本の校訂に於ても同様であつたが、校本三本に間々誌される見消ちは二三を除き、書写者の改訂本文に依つて異同を示した。又、校本中に散点する漢字の明らかな誤写は之を省くことゝした。

(7) 古典文庫本文篇は、底本の彰考館本に於ける誤脱箇処・文意不明箇処を〔　〕印の中に、松平文庫本に依り補訂した処、又は底本の明白な誤字を行間（　）印の中に校者が改補した処とがあるが、校異の際は勿論すべて底本彰考館本文に依つた。猶、行間に附記した欄外見出しは本文校異とは直接に関係を認めず、本文篇に誌す限りに於て、各本間の有無並びに誤読の惧れあるを比校するにとゞめた。

(8) 以上の方法により、各本間の異同を掲出したが、底本に対する校本三本の異同を示す場合、底本に対し、(イ)(ロ)(ハ)の三本、又は(イ)(ロ)或は(イ)(ハ)の二本が

共通して相違する際は(イ)本をもつて之を代表し、(ロ)(ハ)の際は(ロ)本を以つて之を示した。(ロ)本はまた(ハ)本に比し、振仮名を多く施してゐるが、両本相互に特に異訓を認めない限り、(ロ)本の振仮名に従つてそのまゝに記した。扨、この場合にも校本三本間それぞれの異同掲出方法に就いては又右記の条々に従つた。

(9) 猶、本篇に誌るす底本の頁・行数は本文篇に於ける比校本文の各語頭の位置を示すものである。

(10) 又異体文字や漢字は、原則として現行活字に改めた。

本文篇につゞき、校異篇の刊行にあたつて、重ねて貴重な御蔵書の閲覧使用を御許し下された、彰考館文庫・神宮文庫・蓬左文庫・吉田幸一先生各位に感謝の辞を捧げます。また吉田先生には種々御教示御配慮を賜り、御芳情心から御礼申上げる次第です。

昭和四十一年六月

平沢五郎

唐鏡

校異篇

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertong

巻一

頁　行

八―「内題」唐鏡第一―宮内ナシ

1　諸社―三諸山

1　可レ奉ニ読誦一―三読誦したてまつるへき

2　雖レ深シト―三ふかしといへとも

2　春ノ草―三ノ無シ

2　秋ノ風―三ノ無シ

2　易レ驚―三おとろきやすく

2　早傾テ―三早くかたふきて

3　臻ル―三いたる

3　ヨテ―三よりて

3　間―宮松あいた（以下同。省略）

3　無レ他―三他なし

3　頭然（燃歟）―三頭燃

4　不レ怠―三お（を松内）こたらす

6　詣ツ、―三まうてつゝ

6　緱氏山―松維氏（コウシ）山

6　秋ノ空也―宮秋の月・松内秋月、但シ松月の右イニノ空也、と傍記

7　夜ノ潮―内ノ無シ

7　九日ニ―三九日は・松ニィと傍記

8　侍シニ―宮侍るに・内侍に

九―1　思出サレテ―三おもひいたされて

2　講頌儀―宮講頌義

3　時ヨリ―三はしめより・但シ松はしめノ右に、時ィと傍記

3　躰―宮内体

4　今夜―宮こよひ

5　詞―宮言葉

5　人ソ―松内人に・松ソィと傍記

5　言―三ことは

6　儀―宮義

6 縁アリキ—三縁ありて
7 値遇シ—丙値偶し
7 敬礼奉ル—三敬礼したてまつる
8 千部—三千部の
9 良薬ノ—三良薬なりと・但シ㡭な
　りとノ右に、ノィと傍記
9 誠ニ—三ニ無シ
10 三度—㡭丙三たひ
10 仏在—三仏在世・㡭世の右に、イ
　ナシ、と傍記

一〇—1 答申テ—㡭こたへて申て
1 云ク—三いはく（以下同・省略）
1 ナレトモ—三なりといへとも
2 見タレトモ—三みえたれとも
2 性不二分明一—固性分あきらかなら
　す・㡭丙性分明ならす
3 承ラン事—固うけ玉はらむ事は・
㡭丙うけたまらん事
5 伏犧—固伏羲・㡭伏蟲（フキ）、但シ、イニ
　羲、と傍記・丙伏義（フキ）
5 盤。古—三声点ナシ
6 代々。—三世々
7 。幽邈。ニテナラス—三幽邈にして
　つま（は㡭丙）ひらかならす
7 伏犧—固伏羲・㡭伏蟲・丙伏義
8 間事—三あひたの事
9 滞ナシ—三とゝこほりなし
11 不二見給一—三みえ給はす
11 無二（サニ）為方一—三せんかたなし

二—1 御政—固御政事
1 云為（アリサマ）—三ありさま
2 不レ（ラン）知—三しらさらん
2 暮ニ—三暮には
4 自（オ）—三おのつから（以下同・省略）

4 見トカレナン(マ)—固見とかめられな
ん
5 以テ—三もて（以下同・省略）
8 伏犧—固松伏羲・内伏義
9 伏犧—固松伏羲・内伏義
9 御母ヲハ—三ヲ無シ
10 太人—固大人
10 生—固産・松内むみ
10 奉レリ—内たてまつり
10 蛇身—三蛇の身
10 蛇身人首事—固ナシ
二三—1 首—固かしら
1 春日—固春の日
1 明ヲ—固明かなるを
2 受竜図事—固ナシ
3 以レ竜為(ヲテ)レ紀(ト)—三竜をもて紀して
3 瑟—松内琴
4 帝—松内帝の
4 嫁娶礼事—固ナシ
4 始リシ—固はしまれりして・松内
はしまれり
4 初テ—三始て
4 〔八卦事〕—底・固ナシ
5 網(マウコ)罟—固網
6 ヲカレシ—松内ほたれし
6 伏犧—固伏羲・松伏蠢・内伏義
7 書キ—固畫シ・内畫き
7 由レ是(ニ)—固これによりて・松内是(コレ)
に由(ヨ)て
8 生—固なる・松内生(ナル)
8 奉(リ)レ送—三おくり奉りき
8 〔応声大士権化事〕—底固ナシ
9 五濁—固五戒
9 済ハン—固立給はん・内すくはん

9　宣ヘリ—固述たまへり・圖内宣へたまへり

9　〔五常事〕—圖固ナシ

10　愍レ生ヲ—三愍傷・圖傷ノ左ニ、生ィと傍記

11　治メ—固治め給ふにも

一三—1　暫モ廢事—固しばらくも廢する事・圖内暫も廢スル事

1　ナカルヘキ—固なかるへし

1　五常トハ—固内常とは

2　五常—圖内五常は

2　此五常天ニテハ五緯也—固ナシ

2　五獄。—三声点ナシ・固五岳

2　人ニ在テハ—固人に・内ハ無シ

2　五蔵—固圖五臓

3　物ニ在テハ—固物に

3　申ス—固申すは

3　〔日月事〕—圖固ナシ

3　西方阿弥陀—固西方弥陀仏・圖内西方阿弥陀仏

4　吉祥—固老禪

4　ニ勅シテ—固にして

4　造リ—固作り・圖内造て

4　眼目ヲ開ト見タレハ—固目をひらくと見えたり

6　女媧—三声点ナシ

6　伏犧—固伏羲・圖伏蠶・内伏義

6　御妹—固御ナシ

6　女帝也—固女帝也一説に男帝にして女帝にあらすといふ

7　〔始笙簧事〕—圖固ナシ

7　笙簧—圖「万吹物也」ト左ニ傍記

7　西極—三四極

8　〔練石補天事〕—圖固ナシ

9　補セ給シコク—固おさなはせ玉ひ

しこそ・㊁補（オキナイ）を給しこそ・を
ノ左セィと傍記・㊂補給しこそ
9 造ヲレタリキ（ラ脱）—㊀つくられたりき
10 〔宝吉祥権化事〕—㊁㊀ナシ
10 日月造リ—㊀日月を作り・㊁㊂日
月を造り
10 伏犠—㊀伏羲・㊁伏羲・㊂伏義
10 御時ニ申シツ—㊀御時に申内
一四—1 見侍レハ—㊀いひ侍れは
1 伏犠—㊀伏羲も・㊁伏羲・㊂伏義
1 女媧—㊀女媧も
1 若観音—㊀若ナシ
1 勢至ニ—㊀勢至にて
2 オハシマス—㊂おはしはす
3 伏犠—㊀伏羲・㊁伏羲・㊂伏義
3 襲—㊀継
3 合—㊀合せて・㊁㊂合て
4 次帝—㊀次の帝
4 申ス—㊀申き
4 有喬氏—㊀有橋氏・㊁有巣（ソウ）
5 小典—㊀少典
5 妃タリ—㊀ひめたり・㊁㊂妃（ヒ）也
5 遊テ—㊀ありて
5 神人—㊀㊂神人の
6 〔人身牛首事〕—㊁㊀ナシ
6 奉レ生—㊀㊁う（㊂む）みたてまつる
・㊂むみたてまつり
6 身ニテ—㊀身にして
6 〔造五絃琴事〕—㊁㊀ナシ
6 琴長—㊀琴長さ・㊁㊂琴の長さ
6 造—㊀作り
7 〔種五穀事〕—㊁㊀ナシ
7 播種—㊀はとこし植・㊁㊂播種（ホトコシウヘ）
9 〔天降粟事〕—㊁㊀ナシ

9 シ玉フ—固なし給ふ・脇内為した
まふ・脇為ィナシ、と傍記
10 八卦ヲ六十四卦ニ成給キ—固ナシ
10 〔嘗草木味事〕—底固ナシ肉味ナシ
10 嘗別テ—固なめわかちて
一五—1 害ヲソ除給シ—固病苦を除き給へ
り
1 〔夙沙民煑塩事〕—底固ナシ
1 夙沙氏—脇夙沙民
1 御時ソ—三御時にそ
2 〔赤松子為雨師事〕—底固ナシ
2 赤松子—固赤松子は
3 教ヘ申ケリ—固をしへき
4 〔医王変身事〕—底固ナシ
4 反身—三変身
5 為二衆生利益一—三衆生利益のため
5 〔祇園牛頭天皇事〕—底牛頭天皇・
固ナシ
5 垂玉フ—固垂たまひて脇内垂給て
7 〔三皇説事〕—底固ナシ
7 申ス—三申ナシ
7 伏犠—固伏羲・脇伏羲・伏羲
7 鄭玄説也—固鄭玄の説也
7 伏犠—固伏羲・脇伏羲・内伏羲
8 申—三す
8 伏犠—固伏羲・脇伏羲・内伏羲
8 申スハ—固すこれは・脇内す・但
シ脇すノ右に申スィハィと傍記
10 次帝—三次の帝
10 小典—三少典
一六—1 大電—固大雷
1 光ノ—固光り
1 繞ヲ—固繞ると・脇内繞るを
2 孕リヌ—固孕み給へり・脇内孕給ぬ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong